
地獄警察 2 4 時！！

蒼井宗仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄警察24時！！

【Nコード】

N5338Z

【作者名】

蒼井宗仁

【あらすじ】

ある日、谷口裕介と愛は事件に巻き込まれ家族を失ってしまう。それから8年後裕介は高校2年生、愛は中学2年生になっていた。平凡な暮らしをしていた2人を再び事件が襲う。

e p . 0 地獄絵図 (前書き)

どうも「地獄警察24時!!」を新しく書き直した蒼井 宗人です。
今度は途中で終わらせないのでご安心ください。

逃げたい。

なのに逃げれない。

別に身体の動きをとめられてる訳じゃない。

という事は頭の中では『逃げたい』と思ってるのに、束縛されている訳でもないのに、身体がその動きをみせないというのは少々矛盾が過ぎると思うかもしれない。

だが今の彼女の陥ってる状況を実際に体験したらいくら肝の据わった人間でも彼女の様になるだろう。

一体何が彼女の動こうとする意識を阻害したのか。答えは簡単だった。

それは『恐怖』だった。

今彼女の目の前には日本刀の様な物を持っている男がいた。いや、厳密に言えば黒装束にフードを被っている為男かは分からない。何故か彼女がそう思ったのだ。

最早男の標的は彼女しかない。それ以外の標的 彼女の家族

はもう血塗れで動かない。あんなに優しくかった両親、あんなに無邪気だった弟、そして彼女の事を守ると約束してくれた兄。

男は倒れている兄を少し見た後、彼女の方に意識を移した。この時彼女は死を覚悟した。そして昨日の兄とのやりとりを思い出していた。

小学校に入学する三日前 つまり入学するのは明日だった に

彼女は学校に行くのに気分がのらなかった。

普通に言ってしまうえば逆にこういう時はしゃぐのが当たり前だし、年齢的に考えてもそれが妥当だ。

別に学校に行きたくない訳ではない。むしろ彼女からしてみれば学

年が違うといえど大好きな兄と過ごせる時間が増えるのだから喜ばしい事だ。ただそれ以上に不安なのだ。自分がクラスメイトとうまくやっていけるかが。一応両親にはそれが分からないようにやりすごした。心配がかからないようにだ。たかが6歳の女の子の芝居だったが何故か気づかなかったようだ。3歳の弟は言うまでもない。小さい純粋な子供ほど鋭いというものもあるが逆に純粋すぎるが故に相手が芝居だと分からないものなのだ。そしてそれは兄にも通じたと思った。だがやり過ごしたあといざ眠ろうと思ってもやはり不安感が蘇る。どうしても眠れず布団から体を起こすとなんと部屋の入り口に兄がいるではないか。一瞬ビクリしてあたふたしかけたがそれを遮るように兄が口を開いた。

「お前、何がそんなに不安なんだ？」

「！」

まさか気付いたというのか？

自分は芝居が上手いなんて彼女はそんなこと思っていないだろう。たださっきの兄の反応は薄かったので気付いてないと思ったのだ。

「さっき話した時何か変だと思ったから心配になって来てみたらやつぱり何か隠してたのか。」

「だ、だって心配かけたくなかったんだもん！」

思わず泣いてるのを隠せずに声をあげる。

そして兄はそんな妹にため息をする訳ではなかった。

そっと胸に抱き寄せたのだ。（普通なら顔を紅くするところだが彼女は6歳だ。そんな年の子供にそんな感情はない。）

「何が不安なのかは知らないけどな、俺達は兄妹なんだ。そして兄は妹を守るものなんだ。だから例えお前に不安な事があっても大丈夫だ。」

そこで兄は抱き締める力を強くする。

そして兄は言った。

「俺が守ってやるから！」

それは彼女を安心させるのに、彼女の不安を取り除くには充分すぎる言葉だった。

しかし回想は突然の激痛により強制終了を余儀無くされた。

何を思ったのか男は彼女の脚を何度も切りつけているだ。この激痛は例え彼女じゃなくても耐えられないものだ。

やがて男は飽きたのかトドメだといわんばかりに刀を一気に振り上げた。

しかし刀が降り下ろされる事はなかった。

男の脚を兄の手が掴んでいる。まるで妹に手を出すなというように。しかし男はその少年の必死の想いをその顔をさらに切りつけた。刀の先は兄の右目の下から上までを切り裂いた。その時の反動で兄の手は男の脚から離れた。

これで邪魔をする物は何もない。男はそう思ったがその考えは甘かった。

突然玄関のドアを蹴破って若い男が入ってきたのだ。

その若い男　　乱入者はこの惨状に酷く顔を歪めた。そして彼はこの惨状を作り出したと思われる男　　犯人にここに来るときに予め用意していた警棒をもって捕らえにかかった。

しかし犯人は素早くかわして警棒を持つ腕を深く切り裂いた。乱入者の男は少し怯んだがめげずに警棒を左手にもちかえて横を向き素早く振り抜いき、刀を弾き飛ばした。

そこまではよかったのだが相手が丸腰とはいえ彼は負傷した身だ。相手の方が速く動けるだろう。

そんな彼の予想が当たり警棒を持った腕が掴まれ膝げりをうけてし

まい思わず彼の唯一の利点を手放してしまった。

そして彼は地面に叩きつけられてしまう。さらにその上にマウントをとられてしまい首を絞められる。完全に不利だ。彼はそう思ったからか左手を使い手探りで何かこの窮地を脱出できる物を探した。犯人の首を絞める力が徐々に強まり、その代わりといわんばかりに彼の意識は徐々になくなっていった。

しかし彼は最後まで意識をなくす前に丁度良いものを見つけた。台所に近いからか分からないがたまたま包丁が落ちていたのだ。彼はそれを掴むと力任せに犯人の肩に刺した。それで犯人の手が離れて彼はチャンスだと言わんばかりに包丁で犯人の胸を真一文字に切りつけた。

それをうけ犯人はすぐに逃げたした。彼が起き上がった時には既に犯人は現場から消えていた。しかし彼は迷う素振りもなく無線機を取り出して大声で言った。

「至急現場周辺に応援を呼んでくれ！犯人は肩と胸に怪我をしている！それと救急車を直ぐに呼べ！現場は地獄絵図だ！」

その言葉を言い終わった後にさっきまで襲われていた少女
谷^{たに}の意識は途絶えた。

e p . 0 地獄絵図 (後書き)

ちなみにこの時の裕介は丁度小学3年生に進級、愛が小学校に入学したと考えてください。

e p · i 下等な人間（前書き）

メリークリスマス。

前回書いて思ったけどやけに大人っぽい気がするんですよ、小3
と小1の子供なのに。

e p . i 下等な人間

人にはそれぞれ嫌いで尚且つ恐れているものがあるだろう。人によつては高い所だったり暗くて狭い所だったり鋭く尖つたなにかの先端だったりなど様々だ。(言うまでもなく最初のは高所恐怖症、2番目は閉所恐怖症、3番目は先端恐怖症である。)

ではこの俺、谷口 裕介が最も嫌いで、最も恐れているものは何か？

「ひったくりー！」

平穏だった場所にそんな悲鳴が響く。振り返ってみると女性物のバッグを持って自転車に乗った男がこちら側に走って来ていた。そして男が走って来た方向を見るとさっきの悲鳴の発信源だと思われる女性が呆然と立っていた。

瞬時に事態を理解した俺はすぐに行動にうつつた。 と言つても腕を横に伸ばしただけであるが。

「へっ、コイツは頂くぜ！」

ひったくり犯はそう言った。 まあよくありがちな台詞だ。そして大抵こんな台詞をいい放つとどうなるかと言うと

「がふっ!？」

こうなるのである。

ひったくり犯は俺がつきだした腕に顔をぶつけたのだ。そして自転車で走っていたひったくり犯が突然顔をうち物理的に正しい動きをすると

ドゴッ!

ひったくり犯自身は半回転して頭をうち自転車だけ前に進んでいくというシニールな画が出来るのである。

倒れたひったくり犯をうつ伏せにして左腕を裏返しそこを押さえつける。一見簡単に逃れる事ができそうであるがそういうのは所詮言うが安し行うは固し。実はこれ簡単には逃げれないのだ。

ひったくり犯はなすすべもなく駆けつけた制服警官に捕らえられた。

「お手柄だったね。」

駆けつけた警官がそんなことを言ってきた。

「いえ、当然の事をしただけですよ。犯罪者はこの世で一番嫌いですし。」

そう、この俺谷口 裕介が最も嫌いで最も恐れているもの、それは犯罪者だ。

「ほう。君、名前は？」

俺の名前？聞いて意味があるのだろうか？

「谷口 裕介です。」

一応答えておいた。

「ふむふむ。谷口裕介君と。よしこれでいい。」

と警官は持っていた手帳に俺の名前を書いた。この警官・・・

「僕の名前は青井湯治あおい とつじだよ。あおいのあおは色の青でいは井戸の井、とうじのとうはお湯の湯、じは治るとかいて治だよ。階級は巡査ま、よろしく。」

あまりこの警官とは関わりたくないな。何がよろしくだ。そんな台詞じゃあまるでまた俺とあんたがまた関わる事になるみたいじゃないか。

俺は結局青井と別れたのだが一体何者なんだあいつは？

谷口ならまだしも裕介の方の漢字は訊かなきゃわからないだろう。それをあの青井って人、訊かずに完璧に書きやがった。勘で書いた

ととれるがそれなら俺に確認をとったっておかしくない。

（これから考えると一番の可能性としては最初から俺の名前を知っていた事が考えられるな。だけど何故俺の名前を？）

そこまで考えて俺は頭を横に振った。

（考えすぎだな。）

そう考えすぎだ。世の中は常に不条理だ。理屈では動かない。あの警官が俺の名前を完璧に書いたのは単なる偶然だろう。

s i d e 青井

彼が頭を横に振っているのがわかる。何か考え事してるのだろうと青井は思った。そして同時に他の考え事をしていた。

（あれが谷口裕介ね。僕には目をつけておく必要のないただの高校生にしか見えないけど。ボスの指令だから仕方ないけどさ。）

そして腰に着けた拳銃を取りだしバッグをひったくられた女性に向ける。

「ひっ、」

突然拳銃を向けられたのだ。女性に怯える以外の選択肢しかない。そして普通ならここで悲鳴をあげるかもしれない。だがそれは叶わなかった。

青井は無情にも引き金を引いたのだ。そして撃たれた女性は血飛沫をあげながら倒れた。

「ちよつ、なにも殺すことなかったんじゃないんすか？いくら人払いかけてるからって無関係の人間を。」

先程捕らえられたひつたくり犯が青井に言う。

「記憶消しちまえばいいのに。」

とひつたくり犯こと丸山が言った。

それに対して青井は丸山を睨みながら言った。

「記憶を消す作業が面倒だ。手っ取り早く殺しちまえば死体はお前から下部組織が後片付けするしな。その下部組織の人間がいちいち口をだすんじゃない。」

そう言つて青井は懷に入れてた無線機をとりだした。丸山はへいへいと言いながら哀れな被害者を見ながら思った。

（まさか殺すとはな。第一記憶を消す作業も俺達下部組織の仕事だろくに。ただ単に誰か殺したかったんだろくな。この人はそういう性格だっていうし。俺があこの男とこの人を接触させる為に起こしたひつたくりにたまたま巻き込まれたのが運の尽きって訳か。）

そう考えていた丸山の側で青井は無線で連絡を入れていた。

「こちらウィンター。応答せよ。」

『こちらオール。どうした？』

「ターゲットと接触しました。」

『そうか。公安に盗聴されてないだろうな？』

「ちょっとボス？僕を馬鹿にしすぎですよ？されてたら連絡してませんで。ああ後、下部組織の人間を何名か寄越してください。関わった人間を消したので。」

『分かったが趣味もほどにしろ。あまりやりすぎるとお前が消されることになるぞ。くれぐれもしくじるなよ、オーバー。』

無線が切れたのを確認すると青井はため息をつきながらこう言った。

「ボスもうるさいね。下等な人間なんていくら殺したっていいと思うけどな。」

この台詞を聞いた丸山はやはりこの人とは関わりたくないと思った。

e p · i 下等な人間（後書き）

こんな最初っから黒幕みたいなの登場させて大丈夫かな？
ちなみに裕介君は前回斬られた兄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5338z/>

地獄警察 24時！！

2011年12月25日16時47分発行